

は、原典の文字を正しく傳へること、文書の本様式を破壊せぬこととは何と申しても最重要事であるに、斯かる誤讀の多いのは實に大瑕瑾で學に患なる逐録とは申せぬ。本書を利用せらるる人は餘程注意せなければ意はざるの結果を招くであらう。それは更に角北京にある敦煌文書の大體を知る爲には蓋し便利なる調査報告書である。一昨年六月の刊行とあるも、我が邦へはじめて舶載せられたのは昨年八月下旬であつた。(全二冊、商務印書館發行、價貳元四角)〔那波利貞〕

支那の建築と藝術

關野 貞著

故關野博士が伊東博士とともに支那建築史の開拓者であり、權威者であつたことは誰も知つてゐるが、その勞作は、大著『支那佛教史蹟』とか、『熱河』とか、『遼金時代の建築と佛像』や朝鮮關係の著述以外はあまり親まれてゐない。それは多く建築雜誌とか、美術工藝の諸著録に載せられてゐるためで、歴史家のこれを利用する人は至つて少いのである。したがつて、いまこゝに博士の論文集が刊行され、多くの人々が容易に近きうることになるのはまことに有意義なことである。その最初の一冊『支那の建築と藝術』の紹介にあつて、預告された爾餘の各冊が速やかに出そろはんことを祈つてやまない。博士が細密な考證をされたことは法隆寺の論争などにはよくあらはれてゐるが、へいぜい博士の大著に親んでゐると、さういふ點は見逃しやすく、たゞ大きな仕事をした

方だといふ風に印象されるが、かうして論文集が出て見るとやはりその細緻な學風がよく偲ばれる。

まづ全篇を綜括することく、劈頭に「支那藝術史概説」がある。建築を中心に彫刻、繪畫、工藝と廣範圍にわたつたりたゞ繪畫に關する點のみが少いのはてうど博士の研究された範圍を反映したもので偶然でない。これを伊東博士論文集の綜括篇である「支那建築史」とか、「東洋建築史」にくらべて見るとやはりそれぞれの人の特色をあらはしてゐると思はれる。また大村西崖氏の『東洋美術史』などにくらべて見ると、大村氏の文獻的なのに對しこれは全く實物に即してゐて、たしかに一段の進歩といふことができよう。

「支那の陵墓」も博士研究の大きな分野で、晩年東方文化學院における研究の主題であつた。上は周の文武王陵から下は清朝の帝陵に及んだ叙述で、それがみな實地の踏査にもついでゐるのであるから、全く他人のまねできないところである。「支那の瓦及び磚」支那六朝以前の墓塚に就ても古墓研究上注意さるべきものであるが、「支那碑碣の様式」西安府文廟及び碑林「曲阜文廟同文門と濟寧文廟戟門に保有された碑碣」等は石刻研究上見逃すことのできぬ記録であり、また研究である。讀んで西安碑林の條に及べば、誰もその叙述の簡結であつて、要領をえてゐるのに喜ぶであらう。「南北朝時代の塔と健陀羅塔との關係」は塔婆東漸のあとを論じ、「嵩嶽寺十二角十五層塔」は嵩山にある唯一、最古の塔婆を紹介し、「慈恩寺大雁塔と薦福寺小雁塔の彫刻圖樣」はこれらの唐代塔婆を紹介するとともに、その楣石線刻の佛殿圖より唐

代の建築を推論した。あとのふたつはさう新しい發表でもないのに、いまでもこれが唯一の典據であり唯一の資料である。いかにこの方面の調査が遅々として進んでゐないかを示すものである。

「瀋陽獨樂寺」「滿洲國義縣奉國寺大雄寶殿」「大同大華嚴寺」の三篇は遼代木造建築の調査研究であつて、前のふたつ古寺は博士自らの發見にかゝる。これに博士發見の嵩山少林寺初祖庵(宋宣和七年建)、伊東博士發見の應縣佛宮寺木塔(遼清寧庫)を加へ、また博士の論證された大同善化寺三聖殿、天王殿をいれると遼金時代の木造建築はほゞうかがへるわけで、そこまでに學界を導いたのはまことに博士の功績であると思ふ。その調査の要領のよさ、考證の適確なことは全く感服のほかはない。これとともに遼金時代の塔塔研究にも随分貢獻されたところがあり、その一斑は「滿洲の古建築と古墳」によつてうかがへる。「大正覺寺金剛寶塔」「乾隆經營の長春園に於ける歐式建築」「熱河の離宮と喇嘛寺」もまた有益な、また興味ある文章である。「後漢の石廟及び畫像石」「六朝時代の畫像石」は「山東省に於ける墳墓の表飾」の著者として、よく歴史家の間にも知られてゐるが、これも下に收めた雲岡、義縣、天龍山、山東諸石窟、及び「大倉集古館收藏の石佛に就いて」等の一聯の石佛石窟研究はまた博士の一面を示すもので、この方面に対する貢獻が偲ばれる。いまこれを常盤博士との共著「支那佛教史蹟」とくらべて見ると、こゝにある小論の方が切實であり、適確であつて、博士の面目が躍如してゐるのを覺える。そのほか玉とか石の雜工に關したものは別に得意のものとも思へぬが、支那から印

度にかけて旅行記はまことに重要な調査文獻であるし、また「西遊雜信」印度の部のごときは宛然印度美術、ひいては東亞美術の概觀であつて、もうひとつ大きな意味における本書の総括篇であるとともに、また誰にすゝめてもよい興味ある讀物でもある。

關野博士が支那建築史乃至藝術史に對する大きな寄與は誰も認めるところであるが、それはどういふ寄與であるかといふと、實地の調査といふ點である。そしてその調査の要領のいゝこと、そしてそれを見事に歴史的に處理されたことが博士獨特の風貌をかたちづくるものであつて、それが博士の「支那藝術史概説」を生んだのである。本書一卷はさういふ意味で支那建築史の、また藝術史の寶庫であるが、この寶庫をいつまでも寶庫として、後生大事にかゝへてをらねばならぬ日本學界の現状をわたくしはなほだ情なく思ふ。菊版八三八頁、別刷圖版八、昭和十三年九月、岩波書店刊、定價六・五〇(「水野清」)

支那考古學論攷

梅原末治著

「此の書は濱田先生の許で過した二十餘年に亙る永い間に、折にふれて書いた私の貧しい考古學上の論攷中、支那に關するもの、集録であつて、次に印行する日本の部分と姉妹編をなすものである。」「いまこれを靈前に捧げなければならぬを思ふと、數々の思出が胸にせまつて、かなしみの涙を新にする次第である。これらの言葉が本書の初めに見えてゐるが著者が本書を編んだ意圖を